視点1

子どもたちの「生きられた時間」と居場所

横井紘子
（大学教員）

子どもたちの「生きられた時間」

子どもたちは、幼稚園で過ごす時間をどのように感じているのだろうか。特に入園当初の子どもたちは、家庭と異なる時間が流れる幼稚園での生活に、戸惑うこともあるだろう。

幼稚園のほうも、入園直後は保育時間を短くし、子どもたちが幼稚園の生活に無理なくなじんでいけるよう、時間的な配慮をすることが多い。筆者が幼稚園で三歳児の担任をした時も、入園直後は、登園時間は九時半、降園時間は十一時で、実質一時間半程度の保育時間であった。

この一時間半という時間は、入園直後の子どもたちにとって、どのように生きられていたのであろうか。

新しい環境に誘われて遊びだし、一時間半があっという間で、「もうお帰りなの？」と言う子どももいるが、玄関でいつ来るかもしれない母親を待ち続け、気の遠くなるような時間を不安な気持ちで過ごす子どももいる。

ほかにも、「すぐにお迎えに来るからね」と言われて母親と離れたものの、五分おきに、「ママはもう来る？」と聞く子どももいる。

横井紘子（よこいひろこ）
十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科講師。現象学的視点から、保育や遊びについて考えています。

黙々と電車を走らせていたかと思えば、「そろそろお片付けよ」と言うと、急に時間が動きだしたかのように、あっという間に片付ける子どももいる。

時間の流れは万人に平等だともいわれるが、時間の感じ方は、人によって、また状況によって大きく異なる。現象学では、このような時間を「生きられた時間」とし、時計の時間や客観的な時間とは異なる時間としてとらえている。

ここでは、子どもたちの「生きられた時間」と居場所の関係について、少し考えてみたい。

現在において未来と過去を生きる

時間は、過去から現在、そして未来へとつながっていくものであるが、現在にいながらも、未来の時間や過去の時間を生きているような場合もある。

例えば、休みに旅行に行くことを心待ちにして、金曜日からそわそわしている子どもは、旅行に行くという未来を現在においてすでに生きていると言える。そして、月曜日も、まだ旅行の時間を生きているように、旅行での出来事をずっと話している場合もある。

楽しいことだけではない。例えば、給食に苦手なものが出る日は、朝から給食の時間を生きることになり、どこか気分が沈んだまま遊んでいる子どももいる。

少なからず過去と未来の出来事にとらわれながら、現在を生きているのが人間だろう。しかし、過去や未来の時間を自分の全存在の足場としてしまうとなると、現在の時間を生きているとは言えない事態にもなってしまう。

幼稚園における時間を生きる

入園直後の子どもたちはどうであろうか。

例えば、先に挙げた、玄関でずっと母親のお迎えを待っている子どもは、母親が迎えに

来るという未来を生きている。また、五分おきに「ママはもう来る?」と言っていた子どもは、迎えが「すぐ」来ることを信じ、未来の「すぐ」をたぐり寄せるように問うている。一見、電車で遊んでいるかのように見える子どもも、夢中になっているというよりは、時間をやり過ごしているように感じられる。そして、「お片付け」となると、突然に時間が動いて現在を生き始める印象を受ける。

こういった子どもたちは、幼稚園における現在の時間を充実したものとして生きることがまだ難しい。つまり、幼稚園がまだ居場所とはなっていないのであろう。

現在が生き生きとする時

しかし、だんだんと幼稚園が安心できる場所になってくると、母親の存在がなくとも、現在が確かなものとして感じられるようになり、現在を生き始めるようになる。

このように、「生きられた時間」という意味で、幼稚園で過ごす時間を現在として生きる姿が増えてくると、子どもにとって幼稚園が居場所になってくるように思われる。

また、本当に子どもたちが夢中になって遊んでいる時は、過去も未来も、そして自分の置かれている状況や状態も意識することがなくなるのだろう。だからこそ、現在が際立って生き生きと感じられ、まさしく、時がたつのを忘れるのであろう。このように、夢中になって遊んでいる子どもの姿からは、現在の生き生きしさと同時に、幼稚園が居場所になっていることが感じられる。

現在が充実していくことを待つ時

では、夢中に遊んでいない子どもにとっては、幼稚園は居場所となっていないのであろうか。

三歳児の担任をしていた時に、朝に家で頭

をぶつけ、少し気分がのらない様子で登園してきた女児がいた。「大丈夫？　何して遊ぼうか？」と声を掛けると、「今日は何もしませーん！」と言う。言い方や表情に怒りや悲しみはなく、不満げではあるものの、どこかすがすがしさや、柔らかさもあった。

そして、女児は砂場近くの軒下に座り込み、少し笑みを浮かべながら周りの様子を見ていた。担任としては気になって、「あっちで遊ぼう」「お砂場やらないの？」などとしつこく声を掛けたのだが、「今日は何もしませーん！」の繰り返しであった。しかし、いつの間にか、砂場に入って遊び始めていた。

遊んでいない子どもの姿を見ると、幼稚園が居場所となっていないのでは、と思い、どうにかしなければと焦ってしまった。しかし、この女児の「今日は何もしませーん！」は、「今の私は何もしないの。動きだせる時間を待っているから、先生も待って」という思いの表われだったのではないか。だとすれば、女児は、過去の出来事や何もしない現在に拘泥していたわけではない。動きだせる未来が現在へと訪れることを自分で期待しつつ、待っていたのだろう。

この女児は、夢中で遊んでいる子どもたちのように、前へ前へと時間を駆り、未来を現在へ吸収するかのように、自ら心身を十分に働かせて、積極的に現在を充実したものにしているわけではない。そういった意味で、この女児の現在は「厚み」があるわけではなく、時間は淡々と淀みなく過去から未来へと流れ去っている。

しかし、女児は単に流れゆく時間を眺めているだけではなく、じわじわと現在が充実していくことを待っており、未来に対して現在が開かれたあり方をしている。現在が満ちていくことを待ちながら、ただそこにいることが許される場所も、居場所なのだろうと思う。